テストボマー

青い絵　八代

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
テストボマー

【Ｎコード】
Ｎ０７９４Ｆ

【作者名】
青い絵　八代

【あらすじ】
テストボマーと思われていた少年がテストボマーキラーとなり最近巷で有名なテストボマーをぼこぼこにする。仲間たちとの交流と暗号物語である。くだらない暗号もあるがこれからはすごい暗号に挑戦できるかも。ぜひ第一部をご覧あれ

第一部（前書き）

テストボマーとテストボマーキラーがどっちか分からなかったら連絡ください。

第一部

テストが大嫌いだった少年がいた。
名前を冷酷　ウィス。
名の通り冷酷、そしてS。時折詩的なことをいう現代用語で探偵のような遊びをしているいわばプリンセス。なぜ、男をプリンセスと呼ぶわけはあとにして、今は彼の私生活を探ろうと思う。

私生活
「テストルンルン、今日もテスト頑張ってくるよ。お母さん」
「そう？頑張ってね」
「うん」
彼はシャキッと、いたって優等生的に歩き始めた。
「よう、プリンセスイス」
黄金の手の持ち主冷酷は特殊な分野においてはすばらしい出来栄えだ。あっ黄金の手っていうのは表現の自由です。
「プリンセスちゃん、おはよう」女子にも声をかけられる始末です。
つまり彼はこの学校の英雄なのです。
彼にも欠点はあります。特に目立つのは本当にプリンセスらしくしろ！と言いたくなります。
「あわわわわわわ」
バナナの皮ですべりました。
「ドテッ」
「プリンセスイスらしくしろよな！ドジ」
彼がこの学校の王子のようなチェックガール和歌　丸。
「男まさりなんだよ、おめーは」
言われて言い返したり。あっこんなことしょぼいと思いませんでしたか？かっこ悪いくらいですけど、うまく表現できないな、転ぶ

のはめったにないんです。でもよくしゃべるんですよ、プリンセスイスは。だから人気者なんです。
今日は偶然転んだみたいです。明日は転ばないよ絶対に。プリンセスイスのプライドはそんな甘いものじゃありませんから。転んだのはー、一時間目ごろなので、テストまでは時間があります。
みんなこんなドジキャラがすごいとは思わないんだ。表側にだまされているんだ。そうプリンセスイスはテストボマーなんです。
見えないかな？この名前の情景が……職員室でテストは発見して喜んでいる姿が。
なーんて冗談です。プリンセススイスはテストボマーキラーなんです。
――テストボマーキラーとは、テストボマーと呼ばれるバカを退治していく。勇敢な戦う者のコトです。
テストボマーキラーの情景はたぶん……テストが嫌いだけど嫌いなんだけど触るのもいやなんだけど仕方なくオドオドと試験の前日におそるおそるゆっくりと職員室に忍び込むかっこ悪いバカというか、無断入場しないために先生に自ら許可をもらう勇敢さというかそんなのが伝わってきたらいいとおもいます。
実ははじめのテストボマー候補はプリンセスイスだったんです。泥棒っぽい風貌でいつも学校に来てたし、テストを恨んでたし……。しかし、
彼は変わったんです。それは誰にもできない、プリンセスイスという名のもの以外は。
「ウィス君、今日は来ないよ」
「タブー！　休み時間はかっこうのテストゲットチャンスだ」
「でも～あやしまれてるよ」
「それが宿命だと思え」
「情けないよ俺たち」
新咲　タブー、ニックネームはなし。伝説の先輩の勇敢さを受け継ぐ中学二年生、当然プリンセスイスの親友。情けない状況は嫌い

だし、やっぱりこの言葉がぴったりだ『森羅万象』。
「森羅万象こうてつてつ！、さあ早く来い」
「ウィスも魔法に頼ろうと思うんだね」
「この休み時間に来なかったらイツ捕まえるんだよ、職員会議で今日は学校があるんだ」
「へぇ～」
森羅万象って何？辞書に載ってるよ～ん。
「タブー！　君は……推理能力ってものがあるかな？」
「ウィスは？」
「今後はシャーロックホームズを読んだり、実践式のスポーツ読本を片手に移動時間を……」
のようなことをウィスが注意すると、
「あのさ、何が言いたいんだよ」
「とにかく、テストボマーの想像以上の力に対抗する手段を知っていてほしいからなんだよ」
「えっ、どういうこと？」
かなり疑問に思い質問する、その表情はまさに鯨にあったときみたいだ。
「大きな声では言えないんだ」
その空気をタブーは察知したのかも。
「うん、まだかなテストボマー」
「さあー」
こうやってしゃべっている間に魔の手が迫ってくるのをせめて僕は感じていたい。
ウィスは思考を展開し、相谷先生が来るのを待つことにした。
相谷先生は小学校からのパートナーと呼べる信頼できる運のいい先生だ。だから中学校にも同じ時期に移動する。
――「ウィス君！　プリンセスって呼べばれてるのはどうして？」
「あっ、そんなことどうでもいいんじゃないかな？」
と聞かれてもこう答えよう、と念頭に置く。

私生活ではこんなに頭のいいテストボマーでも無駄な労働力を使ってしまうのだ。それが天才の宿命、いや命日だ！（意味不明）
「だんだんテストボマーの私生活が見えてきた」
「そりゃ、大体名前で創造できる範囲だよね？」
「そうだそうだけど、しっかりついでおかないと」
このあとテストボマーをウィスはこう定義した。
「テストボマーはかわいそうなもろい面影だ」
こうしてタブーはこう言った。
「テストボマーの面影……俺もなんとなく分かる気がする。それにウィスのすごさも」
「なにいってんだよ、タブーちゃん、ＯＫ？」
「ＯＫです」
どうやら相谷が来たようだ。
「ずばり、今回のテストボマー事件の犯人になりうる人はあなたです。相谷先生！」
月明かりスポットライトのように場を包み込んだ。
「知りたくてもしれない、それがテストの中身です。なのになのにあなたは卑劣だ！」
こういう風にウィスは啖呵をきった。
「ここだけの話だけど、俺相谷先生が男か女か知らないんだよね」
「なんだってー、あっ先生ここだけの話ですよ」
と言って物陰で会話する。
「分かりにくいけど、男です」
「あー、そうなんだぁー、といっても僕にはもうライフポイントは残されてないけどね」
「じゃあ、その勇気をたたえて傍観いや休憩をしていないさい」
「ファイト！　冷酷」
「ずばり、その手に持っているものはなんですか？」
「テストです」
「なんでですか？何であなたが」

「焦らなくてもいいですよ、もうすでにファックスに送りましたから」
「なだと」『ん』を略してしまった。
「なだとですか？面白い、手遅れと言う言葉を知らずに」
――場的にそんなこというなよ。
「ファックスは無意味だ」
「ハー、意味わかんないんですけどぉ」
「どういうことか説明してやろう。お前たちの仲間はすでに他先生たちに捕まえられているからだ」
「わっわあからない」
そして、壊れたかのようにしゃべりだした。
「そっ、そいつは奇遇だ。俺も先生だ、お前を捕まえてやるよ」
「はっ」
――こう見えて僕は空手に精通している。
「先生！　僕が空手をやっていることご存知ですよねぇ～」
そのまま先生は殴りかかる。
「せめて」
また殴る。
「せめて先生は助けますよ。先生は、家庭科のときも運動会のときもいい先生だったから。それに先生は正々堂々と僕に戦おうとした。だから助けます」
ウィスは隙を突いて右手で正拳づきをした。まさに首の急所だった。
「あぶないあぶなーい、先生！　今までありがとうございました」
お辞儀する。「タブー、おい」
――だめだ、寝てる。
「違います、寝ているふりでした」パッと目を開ける。「ウィス～」
抱き合う。
「聞いてましたか？」
「まず、ファックスの謎を説明してもらおうか？」

「ファックスが送られることは、家庭科の時間から分かってたんだ」
「どうして？　そんなことわからないよ」
「観察力をやしなうといいよ、手に書いてあった。あの先生が記憶で間違えるはずがない、でもあの先生は忘れ物などに関してはド級の苦手分野で手に書くのはたいてい寝るや放課後のことを書いているんだ。それで今日はなにかな？って見たら暗号があったわけさ」
「そうだったの？すごいねぇ～ウィス君」
「暗号を見たい人？」
「いらなあい」
「あそうですか」

雑談

「ん？ありゃなんだ？」
タブーは授業中窓の外を見た。そこには窓の向こうから文字を書く人がいる。どうすればいいのか分からなかったため、先生に言おうとすると授業が終わってしまった。先生は何かを隠しているようだった。きっと昨日のことがまだ引っかかっていて、テストボマーキラーに任そうって考えだと僕は考える。
書いてあった文字は逆さで『だ』という雲と『た』という雲だった。
「あっ暗号だ～」
僕は授業が終わった勢いで教室を飛び出し、すぐさま歩いているテストボマーキラーにコンタクトを取ろうと思った。
「ウィス！」
これを見せると……。
「ダウンタウンだね」
「だのうん、たのうんってことね」
「そうだよ」明るい。
「切ない恋のよう♪」
「歌に関してはタブーは満点さ」

「今日はこれで時間を潰しましょう」
「なにかな？」
「じゃーん、情報速リサーチ箱」
「なんだなんだ？」
「これは読者からのアンケートです（うそですよそんなもんねぇからよ）」
「読んでみると、『帰り道は楽しいですか？』とある。タブー君どう思う？」
「歩きながらが、結構ファニー」
「冒険の仲間がもっと増えるといいよね」
「覚醒しゅるしかねぇ～」
「わはははは、あの暗号まだ続きがあるんじゃないか？」
こうして楽しいときが流れましたとさ。木漏れ日のような暗号の続きへ。

木漏れ日のような暗号の続き
「ぴょーん、ぴょーん」
かえるのように跳びながら来るやつ、そいつはボマーダミーだ。
名前は岡江氏　太郎だ。やせていて、目が丸くなくて、いろいろなことで注目されている。言うと学校では人気者だ。瓜目というあだ名がある。
そのことをキラーたちはまだ知らない。
「ああ、今日も人気だぴょ～ん」
「わー」がやがや。
「かっこいい」
人気は落ちてませんＹＯ。

第一部（後書き）

ありがとうございました。

第二部　引くか押すか

「仮にボマーが隣のクラスの人だと考えたら誰だと思う？　タブー」
「私、明日から旅に出ます」
「へぇ～旅に……」
心のどこかでは動揺していた。
「なーんて冗談冗談、たぶん怪しいのは引田かな」
「ひきだねぇ～」
引田は隣のクラスで一番頭のいい奴だ。と同時にいい奴でもある。

「数ある中に～♪　秋を彩る～♪」
最近はまっているカジュアルな歌だ、どうせ今だけしか歌は歌えないだろうから。
――どういうことだろう？　ウィスが暗い。いつもの明るさはどこに行ったの？
「いつもどおり行こうウィス、考え事せずにさ」
「でも君のこれからの人生を考えると……うんうんなんでもない」
「そうだ、今度引田に会いに行こうよ」
「引田？　理由がないじゃん。あっあぁーそうだ……」
「どう？　」
簡単にボマーに近づく方法に気づいた、それはタブーが引田の友達であることを利用すれば簡単だということ。さらに引田に勉強を教わるようにタブーに言えば一石二鳥ってわけ。
「今日こそはボマー発見！　」
「発見だな」
今日は家を出た時間帯が早い、だから余裕がある。引田を待ち伏せすることにした。
「おっ、ウィスどうしたの？　ボマーの様子でも探ってるの？　」

「えっ、怪しい人が数人いてさー。ありとあらゆる場所を張り込みしてもっと確かめたいことをあきらかにしたくてさ」
「そういうことか、頭のいいウィス君となら気が合いそうだ」
その後引田といっしょに三人で学校に登校した。ゆっくりしたペースだたので話しやすかったし、たくさんしゃべれた。ただ、引田はボマーじゃなさそうだ。これは長年学校専門事件に携わっている勘だった。
確かなことは一つボマーはただの犯罪者じゃないということだ。普通ならテストでいい点を取ろうと持って帰るはずだ。そんな話を引田ともした。そのうちボマーの話をしていて怪盗ルパンの話が出てきた。
「ボマーといえばルパンでしょ、やっぱり」
「ん？　」
「そういう定義を俺が持ってるってことなんだけどな」
「ふ～ん、一緒にこの調子で話していたら何か分かるかも」
「それも俺は短絡的だと思うよ。いつどこで何が聞かれているかわからないんだよ」
「引田君はすごいね。驚いちゃったよ」ふと、タブーが語りかけてきた。「引田は僕と友達じゃん、でもそんなに推理力や観察力があるなんて思ってなかった。そんな自分が情けなくてさ、どちらかというと落ちこぼれの僕がなんでこんな話を聞いているんだろうって思ったりもするんだ」
「新咲タブー！　俺と一週間行動を共にしてくれ。そんなに思いつめていたなんて知らなかった。朝の単語覚え、昼休みのワーク予習、徹底的にしごきなおしてやるよ」
「なにいってんの引田、いきなりそれはないだろ」
「ごごめん、嫌ならいいんだ」
「あっ」ウィスが怖い顔をしている。「ひっ、やめとくやめとく」
「残念だなぁ」
こんな話をしていて学校に着いた。

あーあ、引田って本当はどういうやつなんだろう。タブーでさえだまされるそんな奴は一体どうなんだろう。だまされるっていうのも推測だけど、ボーっとしてたら友達がなくなっちゃうなぁ。今日学んだことは本当に大きい。

先生の話を聞きながら鉛筆をくわえていると、やっぱりだらけて見えるのか、先生がにらんでいる。くわえるのを外してもにらんでくる、どうして？　そう思って後ろを見たら、生徒が一人寝ていた。世の中勘違いもあるんだなぁと学んだ。好きな先生の授業でにらまれるなんてそれ以前に嫌がるべきだったのかもしれない。そこで。

「先生、わからないところ教えてください。ボーっとしていて聞けなかったんです」

「そうか、気をつけろよ」

そして先生に勉強を教わった、その後……。

「いろんな意味で気をつけろ、人間関係でも支障をきたしている、君は。まだ早いか」

時々不思議なことを言う先生です、まるで占いみたいに。心理学の授業をしていたとか。

僕はそのときには気づけなかった、僕の恐ろしい未来を。

振り返って先生はこう言った「寝るときにビー玉を握っとけ」と。

教室ではいつもの光景、ただ一つ違っていたのは、僕がいないことだった。

僕がいないというのは、本当の僕がいないということだ。実はさっきうわさを聞いた、ボマーの話をボマーがいろんなとこで多発していると。そのプレッシャーは数あるものだ。秋なのに秋なのに食欲が出なかった。このストーリーはこの調子でだらだら進むのだろうか、そうじゃないのか。

補足

ビー玉を持って寝てみました。

すると恐ろしい未来が、これからはジャンヌダルクのように神の申し子として……いや。そんなの関係ないし嫌だ、計算ずくでなんとかするんだ。何事もなかったかのようにひそかに運命を変えるんだ。それこそ誰がどこで何をしているのか頭に入れて、自分のことも考えて。

結論、多発するボマーに夢のように恐れをなさず計算ずくで相手をするしかないってこと。

第二部　引くか押すか（後書き）

ありがとうございました

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0794f/

テストボマー

2010年10月9日23時47分発行